

仙台市の日本バドミントン・ジュニア・グランプリに見る スポーツによる地域振興の成果と課題

常磐大学大学院客員教授 井上 繁

「甲子園」や「花園」を各地に

青少年があこがれるスポーツの全国大会の拠点としては、高校野球の甲子園（兵庫県西宮市）や、高校ラグビーの花園（大阪府東大阪市）などが著名である。高校生だけでなく、小学生、中学生も目標とするスポーツのメッカづくりができないかという話が小泉純一郎内閣の時代に持ち上がった。これを受けて、2005年度に当時の麻生太郎総務相（国民スポーツ担当）の元で具体化したのがスポーツ拠点づくり推進事業である。

スポーツ拠点づくり推進事業は、一般財団法人全国市町村振興協会が「スポーツによる地域振興助成事業」として一般財団法人地域活性化センターに助成している。小・中・高校生が参加する各種スポーツの全国大会を継続的に開催しようとする市区町村とスポーツ団体を支援することで、スポーツの振興と地域の再生に寄与することを目的にしている。今回は、その助成を受けて第13回日本バドミントン・ジュニア・グランプリ2014を開催している仙台市を2014年11月22、23両日視察した。

助成を受けるには、スポーツ拠点づくり推進委員会（委員長大森彌東京大学名誉教授）が開催計画を承認し、承認スポーツ大会として認められる必要がある。初年度の2005年度に、北海道富良野市の全国高等学校選抜スキー大会（アルペン種目）、三重県四日市市の全国ジュニア自転車競技選手権大会など31大会を承認したのを皮切りに、2014年度までに67大会が承認されている。

助成対象は、承認大会開催費のうち、市区町村が負担する大会の開催に要する経費である。助成限度額は、原則として、毎年度、1件につ

き400万円以内である。ただ、大会の継続的な開催に必要な備品購入費など初期費用の負担が含まれる場合は800万円以内となる。助成期間は最大10年である。1市区町村当たりのこれまでの助成額は、10年間で約5,000万円に達しており、地域活性化センターの助成としては破格の額である。

「スポーツシティ仙台」をめざして

政令指定都市の仙台市は、東北最大の100万都市であり、東北の行政、経済、学術、文化の中心的な機能を担っている。都心部はケヤキ並木など緑に恵まれており、「杜の都」と呼ばれる。産業別就業人口構成比は、商業、サービス業を中心とした第3次産業が84.0%（2010年国勢調査）と高い。市外の大企業の支店、支社が多く立地しており、支店経済都市とも言われる。

同市は、2002年度にスポーツ振興基本計画（せんだいスポーツ元気プラン）を策定した。これに基づき、「する」、「見る」、「支える」の3本柱で様々な施策を展開してきた。

その後のスポーツを取り巻く環境の変化に対応して、2012年度には市が目指すスポーツ施策の方向性を示す仙台市スポーツ推進計画を策定した。

同計画によると、基本理念を人とまちの元気を育む「スポーツシティ仙台」としている。これまでの「する」、「見る」、「支える」を継承するとともに、「広がる」を加え、この4本柱を市のスポーツ推進の目標とした。「広がる」は、スポーツ活動が人から人へ世代を超えて広がり、スポーツを通じた様々な交流につながることを目指している。

仙台市には、サッカー・J1リーグのベガル

タ仙台、プロ野球の東北楽天ゴールデンイーグルス、プロバスケットボール・bjリーグの仙台89ERSの3プロスポーツチームが本拠地を置いている。

ベガルタ仙台にはベガルタ仙台ホームタウン協議会、東北楽天ゴールデンイーグルスには楽天イーグルス・マイチーム協議会、仙台89ERSには仙台89ERSとともにまちづくりをすすめる会「イエローブスターズ」という支援組織が存在するなど、多様なスポーツを「見る」、「支える」環境が整っていた。

今回視察した日本バドミントン・ジュニア・グランプリは団体戦で、小学生、中学生、高校生の出場する男子、女子の都道府県対抗戦の大会である。仙台市と日本バドミントン協会が主催して、2006年度の第5回大会以降毎年仙台市で開催している。

仙台での開催については、2004年10月、仙台市が日本バドミントン協会に2006年の第5回ジュニア・グランプリからの同市での開催要望書を提出して実現した。会場は、メイン会場の仙台市体育館のほか、仙台市宮城野体育館も使用している。

チーム編成は、監督1人、コーチ1人、選手は小学生2人、中学生と高校生は各4人以内で、監督、コーチを含めて6人以上12人以内である。ただ、コーチは付けなくてもよい。小学生はシングルスのみで、中学生と高校生はシングルスとダブルスを兼ねて出場できる。出場選手は、各都道府県のバドミントン協会が、中学新人戦や全国高等学校総合体育大会（インターハイ）での成績などを基に指名している。

2013年度の第12回大会は11月22日から3日間開かれ、35都道府県から男女それぞれ38チームが参加した。参加選手は小学生119人、中学生248人、高校生249人で、合計616人である。参加した監督とコーチは132人で、参加総数は748人、観客数は延べ2,050人だった。開会式では、東日本大震災で大きな被害を受けた仙台の復興にかける思いや、全国からの支援に対する感謝の気持ちを込めて、市内の中学生120人が「復興ソング」を合唱した。

2014年度の第13回大会は11月21日から3日間開かれ、36都道府県から男子38チーム、女子37チームが参加した。このうち、北海道と宮城

県は2チームが参加した。参加選手は小学生115人、中学生246人、高校生237人で、合計598人である。参加した監督とコーチは133人で、参加総数は731人、観客数は延べ1,970人だった。

小、中、高校の児童、生徒がボランティアスタッフとして大会の運営を体験した。会場には、地元商店街の協力で、牛たんや笹かまぼこなど仙台名産品の販売コーナーを設けたり、東北3大祭りの一つである仙台七夕祭りの華やかさの一端を味わってもらうため七夕飾りを掲げたり、工夫した。

オリンピック選手などを輩出

日本バドミントン・ジュニア・グランプリの仙台での開催は2014年度で9回目となり、10月に開催される全日本大学女子駅伝などとともに、今では仙台の秋を彩るアマチュアのスポーツイベントとして定着した。

仙台市には、プロスポーツ3チームのほか、女子サッカーのベガルタ仙台レディースと、女子バレーボールの仙台ベルフィーユの準プロ（クラブチーム）2チームが本拠地を置いている。こうしたプロ、アマの多くの試合がこの地で行われ、スポーツが市民生活に根付いてきているのは成果である。

それは、「週1回以上の運動を行っている15歳以上の市民の割合が2005年の26.1%から2010年に36.4%に、年1回以上競技場でスポーツを観戦する市民の割合が2005年の31.8%から2010年に47.2%と、それぞれ向上している」（『仙台市スポーツ推進計画（2012～2021）』による）ことから明らかである。

バドミントンで言えば、2012年のロンドンオリンピックに出場した佐藤冴香選手をはじめ、2014年の韓国でのアジア大会の女子ダブルスで銀メダルを獲得し、ファイナルで世界の頂点に立った高橋礼華・松友美佐紀両選手のペア（日本ユニシス）など仙台の高校出身の有力選手を輩出している。これも、小・中・高の競技者や指導者が協力してジュニアから一貫した指導体制を整えたことで、競技人口の裾野が広がり、競技技術が向上した成果といえよう。

東日本大震災で甚大な被害を被ったため、2011年度の大会は開催が危ぶまれたが、関係者

の努力や、小・中・高校生を含む市民の協力で開くことができた。これは、関係者や市民の熱意の賜物でもあった。

参加都道府県をいかに増やすか

日本バドミントン・ジュニア・グランプリに参加したチームは、2014年度の場合、47都道府県のうち、男子が36都道府県、女子が35都道府県だった。全国大会でありながら、都道府県の参加率は76.6%にとどまっている。参加都道府県をいかに増やしていくかは、大事な課題である。

参加を見合わせているのは、西日本の県である。小・中・高の児童、生徒の混合大会については、各都道府県バドミントン協会などからの選手に対する参加費補助額が少なく、自己負担がかさむ傾向がある。遠隔地からの不参加が目立つ背景には、こうした事情もある。

スポーツに力を入れている同市では、日本バドミントン・ジュニア・グランプリだけでなく、1万人が参加する仙台国際ハーフマラソンなどの国際スポーツイベントや、全日本大学女子駅伝、実業団女子駅伝といった全国スポーツイベントが定期的に行われている。

こうした大会を円滑に行うには、運営スタッフやそれを支えるボランティアなどの確保が欠かせない。ボランティアなどの確保はいつもつきまとう課題である。

日本バドミントン・ジュニア・グランプリを仙台で開催した初期の頃は、他の大会と日程が重なり、スタッフやボランティアの確保に苦労した。

各都道府県の小学校、中学校、高校から選手が出場するため、運動会など学校行事とのバッティングも避ける必要がある。このため、当初は10月だった日程を1カ月ずらして、現在は11月第3週の金、土、日曜日にほぼ定着している。日程の調整も大事な課題である。

試合以外の企画も課題である。これまでも「参加選手に仙台伝統芸能のすずめ踊りを指導」(2007年)、「元オリンピック選手や地元実業団チームの選手による一般小学生向けのバドミントン教室の開催」(2009、2011年)、「東日本大震災後の全国からの支援に感謝するため、被害状況の写真パネルの掲示」(2011年)など工夫して

きた。マンネリにならないように趣向をこらすことが大事である。

2014年12月には、仙台市、地域スポーツ団体、商工・観光団体、旅行・運輸団体、ボランティア団体などが結集して、スポーツコミッションせんだい(会長・奥山恵美子仙台市長)の設立総会を開き、発足した。

この組織は、①多種多様なスポーツイベントの誘致や開催支援を通じてスポーツによる街の活性化を図る、②スポーツイベントの魅力向上など地域のスポーツ振興を図る、③スポーツボランティアの育成などスポーツを支える力の強化を基本目標にしている。このため、スポーツイベントを誘致してそれを運営し、広報や宣伝に協力するとともに、スポーツを観光資源としたツーリズムを提案していく方針である。市民とともに、これをどう育てていくかも課題である。



熱戦が繰り広げられた第13回日本バドミントン・ジュニア・グランプリ2014の男子決勝トーナメント(2014.11.23、仙台市体育館で)



会場のあちこちでジュニアボランティアが活躍(2014.11.23、仙台市体育館で)